

原著論文

カントの『人類の歴史の臆測的起源』についての一考察 “『聖書』引用に見えるカントの「原罪観」の解釈をめぐって”

上江洲 基¹⁾

A study of Immanuel Kant's “*Conjectural Beginning of Human History*” —Concerning the interpretation of ‘original sin’ appearing in his quotations from the “Bible”

Hajime Uezu¹⁾

要 旨

カントは『人類の歴史の臆測的起源』の中で、人類始祖の犯した墮落行為、所謂「原罪」に対して、人間が「理性」を獲得するためにはそれもやむを得ないとするような論調を展開している。人類史における「悪」の問題には、『聖書』に見られる「原罪」が何らかの形で関わっていると考える考え方がこれまでの倫理学の伝統的な態度である。また倫理学が絶対的「善」を探求する学問である以上『人類の歴史の臆測的起源』で展開されているカントの「原罪」に対するとらえ方には俄かに頷けないものがある。

西田幾多郎が『善の研究』の序で「哲学の終結と考えている宗教」と述べているように哲学・倫理学の研究は最終的には何らかの意味で宗教と連結されることは自然なことであろう。カントには宗教に関する論文が『理性だけの範囲内における宗教』等数編あるが、『聖書』を第一資料として人類の起源にまで遡って考察されたものは『人類の歴史の臆測的起源』が代表的なものである。

本書はカントが『聖書』の「創世記」に見られる記述を人類史の起源として論を展開しているから、人類の先祖に如何に悪が侵入して行ったか、その原因並びにその動機・経緯等を考察するのに『人類の歴史の臆測的起源』は倫理学研究の上から特にその原初的な探究の点から最適な資料となるはずである。

本書全体が『聖書』を資料として論が展開されているのであるから、どうしても宗教的要素が濃くなることは避けられないのは当然である。

カントは『実践理性批判』の中で「道徳は、どうあろうと宗教にたどりつき、こうして人間以外の全能の道徳的立法者というイデーにまで広がる。この立法者の意思の中にある（世界創造の）最終目的は、同時に人間の最終目的でありうるし、またそうでなければならぬのである」と言い切っている。同時に、また一方では、前述の『理性だけの範囲内における宗教』の序文で「道徳に宗教の必要性は全くなし」と言い放っている。その様な両極端なカントの宗教に対する態度について西田幾多郎も『善の研究』『場所的論理と宗教的世界観』等の中で痛烈な批判を展開している。本稿では西田のこれらの指摘を引用しながら分析検討を加えた。

また本稿において「倫理学」は「善」と言う徳目を単に歴史的、学問的に研究するだけでなく、その然るべき徳目を実生活において実践的に行うことによって自己の心を道徳的に純化して「人格を完成して行く」という具体的な目的を成就する為の「手引書」・「指南書」のような実学的なものでなければならないとする主張を展開した。当然、かかる主張はこれまでの倫理学には存在しない。

これまでの倫理学研究が「他者」への行為のあり方に研究の中心が置かれている事に対して、本稿では倫理学は本来、人間としての「自己を完成させるため」言い換えると「各々の人格を完成させるため」にその方法を具体的に示すべき学問でなければならないと主張した。そのように倫理的行為の実践が己の人格向上に繋がることから「情けは人の為ならず」と言う諺をもじって「倫理は人の為のみならず」

¹⁾ 名桜大学国際学群 〒905-8585 沖縄県名護市字為又1220-1 Faculty of International Studies, Meio University, 1220-1, Biimata, Nago City, Okinawa Japan 905-8585

とすることが出来ると考える。

しかしながら『人類の歴史の臆測的起源』には一切その様な論点は見られない。それはカントのみならず今日までの倫理学研究の多くが斯くの如くである。つまり、人間が倫理的に行動するという事は「自分の人格を完成させるため」に繋がる行為であるとの観点に気付いていない証拠である。

「道徳の根拠」の普遍性がどこに存在するのかという倫理学の大きな課題は、今日の倫理学研究でも、まだ明確にされていない。その起源がまず人祖の家庭に於ける「兄弟愛」・「親子の愛」所謂「家族の愛」を中心に更にはその心情を基本として展開されるべきであったことを本稿で強調した。またそれらの原初の形が様々な国に存在する神話や説話に比べ『聖書』において一番明確な形で見られるという事から、倫理研究においてもそれを資料として考察する事の妥当性を主張した。

また同時に倫理学の使命として、人間の完成された人格とはどのような「性格・品格」を有し日々行動するべきであるのか、また「普遍的な善行為」とは具体的にどのような「倫理的行為」を指すのか、それを明確に示して、「己の人格の完成」を希求する者が、具体的に実践し易いようにその内容と方法を一日も早く可視化する事の重要性を示唆した。

またカントの「定言命令」の運用は全人類の「人格が完成された」という条件の下に構築されるものでなければ実際には成立出来ない事は言うまでもない。

キーワード：宗教観・原罪観・墮落・神の痛み・人格の完成

Abstract

Immanuel Kant, in his *Conjectural Beginning of Human History* (1786) argued that it was unavoidable for the first human to commit an act of depravity - 'original sin' - in order to acquire his 'reason.'

Traditional thinking in ethics has found that 'original sin' has something to do with the issue of 'evilness' in the human race. As long as ethics is the science of absolute 'goodness,' Kant's arguments on 'original sin' will not be easily accepted in the way he explained in his book.

Kitaro Nishida also severely criticized Kant's religious perspectives in his books "An Inquiry into the Good" and "the Logic of Topos (locational logic) and Religious Worldview." Taking Nishida's critique into account, this paper will examine and analyze Kant's arguments.

Keywords: Religious Perspective · View on the Original Sin · Depravity · Pain of God · Completion of Personality

はじめに

本稿は哲学者イマニエル・カントが『聖書』の創世記を基盤に、人類の起源に関して論じた論文『人類の歴史の臆測的起源』からカントの「原罪」に対する考えを分析し、検討を加えたものである。

またこれまでの原罪に対する聖書の解釈が人類の先祖（以下「人類始祖」・「人祖」と表記）が神の戒めを死守できず、罪が人間に入ったとする伝統的解釈に加え、倫理的観点からむしろ、その後の人祖達の「責任転嫁・罪のなすりつけあい」という反倫理的行為が原罪のもう一つの正体ではないかという考え方を本稿で主張した。そのことはたとえ『聖書』が宗教書であっても、哲学・倫理学研究の立場からの考察も極めて妥当なことであり、また特に倫理学においては、かかる観点からの論及

を避けては「根源悪」の研究についてはいつまでもその原点にたどり着くことは不可能であると思うからである。

また、前述の「責任転嫁・罪のなすりつけあい」と言う意味は換言すると「思いやり」「同情心」の欠如がその結果になっていると言う事である。そのことは、エーリッヒ・フロムが『愛すること』で次のように述べている。

「(アダムがイヴをかばおうとせず、イヴを責めることによってわが身を守ろうとしたことも、このことをよく示している)。人間が孤立した存在であることを知りつつ、まだ愛によって結ばれることがない、ここから恥が生まれるのである。罪と不安もここから生まれる」

この考え方は、アウグスチヌスを嚆矢とする「原罪」の考え方に全く新しい視点を注ぐものであり、伝統的「原

罪」を認めないペラギウスの思想とも深く関係してくるが本稿に於いては「原罪」の解釈をめぐる議論が主題ではないので、その反倫理的行為を取り上げるにとどめ、そのテーマへの論及は別稿に譲る。

又、西田幾多郎がカントのそれらの事について疑問を呈していることも合わせてカントの神観・宗教観について検討を加えてみた。

このようなカントの原罪観を『人類の歴史の臆測的起源』から考察された先行研究は今日カント研究者が多く存在するにも関わらず少なくとも日本ではなされていないようである。それは多くの研究者が『聖書』自体を単なる神話・説話と考えていて『聖書』を哲学的・倫理的観点から探求するという洞察が少ないからではないかと考える。

また『聖書』に見える人祖達の自己中心的な行動や悪行、並びに反倫理的行為が今日の我々の日常生活にまで深く関わっているという予測が出来なければ、無理からぬことである。それは人祖達が当時、正しい倫理観を確立する事が出来ず、またそれを子供達に伝えることが出来なかった結果が今日の社会のあらゆる混乱を生み出す原因の基となっていると言う事に他ならない。つまりフロムの説く「思いやりの欠如」が罪の源になる「原罪」であるとする考えである。

しかしながら、カントは「もの自体」という考え方を西洋哲学史の中で初めて設定した事から、思考の範囲を理性だけの範囲内に規定した為『聖書』の扱いについてもその様に取り扱わざるを得なかったのであろうか。

I. 『人類の歴史の臆測的起源』に見える「原罪」に対するカントの見解

「悪の起源」が西洋哲学では、旧約聖書に見える人祖の墮落行為、所謂「原罪」に起因するということが伝統的な定説であるとすれば「根本悪」の起源もそこに原因があると推測することは自然なことである。

しかしながら、道徳哲学者カントがそのことに然るべき興味を示さないことは如何なる理由からであろうか。

カントは道徳哲学者として、人生は道徳的に如何にあるべきかという道徳律の研究に時間を費やしながらも、その道徳を妨害する悪行為の根本原因を資料として『聖書』に求めるということには関心が薄かったようである。カントが当時のキリスト教会のあり方に不満を持っていたということは有名な話であるが、しかしながらそれは『聖書』の権威をおとしめるものではなかったはずである。

『人類の歴史の臆測的起源』を読む限りカントは『聖書』を多く引用しながらも悪の起源についての探求は『聖書』

に求めてはいない事が分かる。また最初から『聖書』にそのような期待もしてはいなかったようである。

もっともこのことはカント哲学全体からの考察がなされなければならないことは当然であるが、この小論においては『人類の歴史の臆測的起源』に限って論及、考察するものとする。

II. 人祖の「墮落」「原罪」に対する西田哲学の見解

カントの『人類の歴史の臆測的起源』の分析に入る前に哲学者である西田幾多郎が『善の研究』で人祖達の本来あるべきであった姿と罪に落ちた後の状態を論じている部分がある。カントと同じ哲学者の視点から参考までに確認しておきたい。西田はまず哲学・倫理学研究者のあるべき態度を次のように述べている。

「我々は何をなすべきか、何処に安心すべきかの問題を論ずる前に、先ず天地人生の真相は如何なる者であるか、真の實在とは如何なる者なるかを明らかにせねばならぬ」

『善の研究』第二編 實在 第一章

先ず彼の哲学の信念である「真の實在」を追求すべき事を強調している。『聖書』を資料とする場合、少なくとも「原罪」に対する思想的位置づけは、人祖の自由意志の乱用による「墮落」に起因するものであり、その行為が原因で人類に悪が侵入した、ということは基本的に了解されていることである。換言すれば「人間における悪の起源」は人祖の墮落に起因するということである。それ故に、様々な宗教の存在目的は、その悪からの人類の「救いと解放」と言っても過言ではない。哲学・倫理学においても様々な考えがあろうが最終的な目標として、人間が「善く生きる」ことを探求し更にこの世から完全に悪を駆逐する事を目的とする学問でなければならないはずである。そのため「善に生きること」を妨害する「根本悪」の研究は不可避でなければならない。また倫理学・哲学の本来の使命は悪に陥った人間の再生とその克服にあることが動機として根底になければならないことは当然のことである。このことについて西田幾多郎は『善の研究』の中で次のように述べている

「人は神より離れ、樂園は長えにアダムの子孫より鎖されたようになるのである」^{注(1)}

人祖アダムとエバの墮落により人間は遠く神から離れ、苦勞の人生を歩まねばならなくなったのである。また人祖の墮落以前の状態を西田は次のように言う。

「この境涯においては未だ主客の分離なく、物我一体、ただ一事実あるのみである。我と物を一なるが故にさらに真理の求むべき者なく、欲望の満たすべき者もない。人は神と共にあり、エデンの花園とはかくの如き者をいうのであろう」^{注(2)}

これは、人祖の墮落以前の状態と人間の本来あるべき状態を西田が彼の哲学的信念から述べたものである。本来人間はエデンの園において神と一体であり、全てが「主客未分の状態」であった。そのため人間は敢えて真理を求める必要はなく反倫理的な欲望を求めることもないのである^{注(3)}。それは『論語』の為政編に言う「七十にして心の欲する所に従って、矩を踰えず」まさにかかる心境であったに違いない。しかしその状態から均衡を破り墮落に至るに及び下記のように述べている。

「然るに意識の分化発展するに従い主客相対立し、物我相背き、人生ここにおいて要求あり、苦悩あり」^{注(4)}

とあるように、人祖は墮落後このような状態に陥ったのである。西田も人類の悪の起源は人祖の墮落にあると明確に指摘している。

しかし、残念なことに、『善の研究』においては西田は人祖が如何にして、かかる不幸な状態に陥ったかという分析までは説明していない。

それでいながら「人間の本来のあるべき姿」という事を想像し得るということは、西田哲学が人間は本来「主客未分」の状態であらねばならぬ事を常に思想の根底に置いているが故であろう。

人祖の墮落を前述の『善の研究』で説明すれば、人祖のそれぞれの自我の主張が「物我相背く」状態に至り、主客の別が主張され、自他が完全に分裂した結果に陥った状態であると解釈できる。また前述の「人生ここにおいて要求あり」ということは墮落した為に本来的自己を見失った人祖達は必死で本来の立場に戻りたいとする本心からの欲求である。それは、神が創造後に人祖に戒めとして約束した次のことである。

「園のすべての木から取って食べなさい、ただし善悪の知識の木からは決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」^{注(5)}

この神からの戒めを守ることが出来ず人祖は墮落してしまったのである。しかもその人祖の墮落は、神代の大昔に起こった一時期の出来事ではなく、今日もなお継続されているのである。そのことを西田は

「人祖墮落はアダム・エバの昔ばかりではなく、我らの心の中に時々刻々行われているのである」^{注(6)}

西田はこの失樂園の物語は単に過去の出来事としてのことだけでなく、今日もなお日々刻々、様々に形を変えて継続・延長線上にあることを言っている。それ故に今日も倫理学という学問が必要である所以を暗に示唆している。

また『善の研究』の「序」で西田がその書名の命名理由を「人生の問題が中心であり終結であると考えた故である」と述べているように常に「完全なる人格の発展」「自己の真人格を実現する」「自己が全人格の満足を得る」を唱える西田にとってもそれらの夢を阻害する、人祖の墮落に陥った歴史的事実、更にはその動機とその時の情の動静等の研究並びに、悪の起源とその正体を明確にして全人類が出来るだけ早く善を実現する為の研究は重要であったはずである。しかし残念な事に西田哲学・倫理学もそこまでは触れていない。

今後の倫理学の課題はそれらの事を明確にして倫理的行為とは具体的に如何なる行動を指すのかを一日も早く世に明示する事にあるのではないか。

また、それらのことが倫理学研究の目標でなければならぬ事は言うまでもない。倫理学研究においては、そのような事に関する研究の有無がその倫理学研究の質の評価になるであろう。

Ⅲ. 『人類の歴史の臆測的起源』より今日の倫理学の課題を考察する

今日の倫理学研究は、人間が悪に陥らない為の具体的な方法とその対応、更には人間が悪に誘惑されない為の様々なケースを踏まえた修養論的、実践論的な研究がなされているとは思われない。しかしそのような現実的で実践的な方法が具体的な形で一般庶民の前に示されなければいつまでも社会から悪を除去することはできない事は言うまでもない。

20世紀前半に日本に於いて西欧の倫理学とは異なった視点から提示された和辻哲郎の「間柄」の倫理学が世に出ていながら今日まだその真意を理解する研究が充分になされてはいないように思われる。その和辻倫理学は西洋におけるキリスト教を中心としたこれまでの倫理学とは異なり、日本及び古代中国の家族を中心とした精神文化の観点から発想された倫理学である。「世間」「間柄」という視点から、家族を中心に倫理観は確立すべきであ

り、あくまでも倫理は「他者」との関係に於いて構築していくべきであると主張している。この点は西洋に於ける倫理学には見られない神と人間との直接的な関係に距離をおいた倫理学である。倫理観の確立はまず、家庭を中心とした、他者との関係において確立されていくべきであると主張されている。和辻倫理学は倫理学史研究の上で特筆されるべき課題であるが、今回は敢えて言及を避け別に論じたい。

人類の発生の原点を聖書の語るように人類が同じ先祖から発生したとするならば、前述したように、今日の諸悪の根源も人祖達の「原罪」に起因すると考えてよいはずである。墮落後の人祖達は自己の犯した罪の重さに苛まれ、子供たちをまともに教育する余裕がない程に良心の呵責に苦しんだはずである。そのために子供たちはまともな倫理観を確立できずに成長して大人になってしまった。つまり人類は正しい倫理観を子孫に残すことが出来ずに今日を迎えているのである。言い換えれば人類は一度も完全に人格が完成された経験を有しないまま時代を継承し続けているという事である。

そのように考えると子孫にまで遺伝する「原罪」とは具体的に言うと「正しい倫理観を創生出来ず、それを以て子供に伝えることが出来なかった事」と言えるのではないか。今日のキリスト教で言われる、抽象的でただ信じるしかない、遺伝する「原罪」の正体は、正にこのことをいうのではあるまいか。

「原罪」とは、悪が生物学的に遺伝するというのではなく「正しい倫理観を伝えることが出来ない教育の無力さ」更には「自己中心の我欲を具体的に克服することが出来ない倫理観の脆弱さ」が綿々と遺伝している状態の事を言うのではないか。今日、日常的に頻発する様々な犯罪が絶えないことは、基本的にその事に起因していると言っても過言ではない。

カントは人祖の原罪によって犯罪が子孫に遺伝されるという考えは間違いであり、自分の犯した過失は自分に責めを負うべきであると主張している^{注(7)}。

カントはただ信じる事しかできない「原罪」というものをキリスト教の教義が唱える血統的遺伝によるものとは思っていない。しかしながら、なぜ人祖が罪を犯したのかということへの追及に及んでいない事は倫理学研究の上から残念な事である。その様な観点から考えると、やはりカントは「原罪」ということについて、またそれがカントの時代の道德倫理に如何に関係しているかと言うことについてもそもそも興味を持っていなかった様である。

人祖達は他者〔神〕の心情を推し量ることが出来ず、戒めを破り、自己中心の欲望に負けて墮落の道を選んでしまった。またそれだけでなく、その後の神の問いかけ

に対する自己保身の責任転嫁が決定的な墮落の要因であったことは、先のフロムの主張する如くである。またカントは墮落後の人祖の心の状態を次のように述べている。

「欲情に負け、そのあとですぐに不安と危惧の念を抱かないわけにはいかなかった。今、新たに発見した自分の能力をどう取り扱えば良いのだろうかという懸念にほかならなかった。こうして彼は、深淵の縁に立たされたわけである」^{注(8)}

とあるように墮落の結果から人祖達は激しい良心の呵責と後悔にさいなまれ、自己を見失ってしまったであろうことはカントも推測している。

その様なことから、当時人祖達は神との間に於いて、親なる神の戒を無視した結果、神の子としての誇りを失い、その罪の重さに耐え切れず日々その後悔と反省に終始する余り自分たちの子供に対する教育が手薄になったであろうことは先に述べた通りである。

そのことは、『聖書』が語るように供え物が神に受け入れられず、弟への嫉妬を抑える事が困難になった長男カインが人類初めての殺人者になった事が証明している。『聖書』にも描かれていないその辺りのことは想像するしかないが、息子が殺人を犯す事態になるまで親たちは何をしていたのであろうか。

兄がその弟に殺意を覚える程の出来事であるから尋常ではなかったはずである。『聖書』には具体的な記述は記されていないが、殺人に至るまでの過程は凄まじい葛藤、熾烈な人間関係の闘いが人祖の家庭にはあったであろう。

しかしながら、カントはこの兄弟間における殺人という大事件に対しても一言も言及していない。

もしカントが人祖のアダムとエバの立場であったならば嫉妬に猛り狂い殺意に燃える息子カインをどのように諭し諫めたであろうか。もしカント倫理学がその怒りを治めることが可能であったならば、ここにカント倫理学の実践的な実際の力を見ることが出来るのではあるまいか。また同時にその課題は現代社会を生きる我々にも同じ様に投げかけられている。熟慮を要する問題である。

この事件は子どもの殺人という犯罪を未然に防ぐことができなかった親の教育力の足りなさを明らかに証明している。しかしながら、このような家庭内に於ける最大の反倫理的行為である殺人に対してもカントは何らの言及もしていない。

そのようなカントの態度から『聖書』のこの失樂園の物語を彼が如何に解釈していたかを伺い知ることが出来るると同時に彼が『聖書』という書物の存在をどのように見ていたかと言うことをも同時に知ることが出来るのではないか。

またそのことは、カント倫理学の盲点であると言えるのではない。

先に筆者は「原罪」とは親たちが「正しい倫理観」を有していないため、それを子孫に与えることが出来なかった事であると述べた。それは過去のことだけではなく、今日も人類は「人格の完成した親」の教育を受けることが無い状態のままに生きていくと言える。そのため人類は今日に至るまで、本来目指すべき「人格の完成」への道は閉ざされたままである。

更に危惧すべきは今日の倫理学研究者、教育関係者から「人格が完成する」などという事が果たしてあり得るのか、等の疑問が投げかけられることである。

実はその様な問いは、哲学・倫理学という学問の存在意義、価値等を確認するのに良い機会になるが、更に重要な事は、それらの研究に関わる研究者のそれぞれの思想の起点を確認する絶好の機会になるものと信じるものである。

しかしながら、その様な問いには今後の哲学・倫理学研究のあり方に対して多くの深刻な問題が胚胎されている事は言うまでもない事である。

IV. 『人類の歴史の臆測的起源』執筆時のカントの環境、並びに西田幾多郎のカント批判について

『人類の歴史の臆測的起源』でカントは『聖書』の創世記を手掛かりとして人類の起源を解釈している。これは飽くまでも推測であるが、カントは本論文を執筆中に『聖書』を傍らに置いて確認することはなかったのではないかと考えられる。換言すればカントはこれまで培ってきた『聖書』の記憶のみを頼りにして本論文を執筆したのではないかと想像できるという事である。

このことは本小論のテーマと直接に関わるものではないが、カントの『聖書』に対する考え方、並びに『人類の歴史の臆測的起源』執筆当時のカントの信仰に対する態度を伺い知ることが出来ると思えるので論述を加えたい。

言うまでもなく頭脳明晰であるカントは『聖書』の多くを暗記していたはずである。カントの幼い頃の家庭における宗教的背景は厳格な敬虔主義であり、父母とも非常に信心深い方々であったようである。しかしカントは16歳でケーニヒスベルグ大学において神学を専攻してからは、それ以上に宗教に興味を持つことはなかったと言われている。このような事から推察するとカントにはキリスト者が体験するとされる啓示的な深い「宗教体験」はなかったようである。そのために、淡々と理性哲学者として哲学的思考を重ねる事を中心とした人生を歩んできたに違いない。しかしながらカントが若い頃に『聖書』を深く学んでいたであろうことは、彼の多くの著作の断

片から明白である。

そのため、カントは『人類の歴史の臆測的起源』を執筆する際、敢えて『聖書』を確認せずともこれまでの記憶を辿りながら著述を続けることはそれほど困難なことではなかったと想像される。

それにしても「創世記」に見える失樂園の物語に対するカントの解釈はあまりにも淡泊であり即物的ではないだろうか。エックハルトの「人祖は墮落後何らかの機能不全に陥った」と言う伝統的見解に対して、後世のカントが道徳倫理学者の視点から関心を示していないことは誠に不思議なことである。

倫理は必ず「他者」との関係において存在するはずであるからエデンの園に於けるカントの視点には人祖から見た「他者」の立場にある神という存在は全く意識されていない事になる。

「原罪」が人祖の自由意志の乱用による墮落行為に起因するものであるならば人祖の墮落の現場の一部始終を目の当たりにしていたと思はれる創造主であり親なる神の驚愕、失望、嘆き、悲しみにはカントは何ら関心を示していない。

その様な観点からもカントの『聖書』に対する態度、更には神という存在の捉え方を伺い知ることが出来る。

少なくとも『聖書』を資料として歴史を語るのだから、いくら理性の範囲内の思考と規定したとしても「他者」としての神の存在が眼中に無いという事は如何なる事であろうか。その事は善悪の起源を『聖書』に求め且つそれを資料として倫理学を研究する者にとって熟慮を要する重要な問題ではあるまいか。

創世記の物語は特別な神学研究の知識を必要とせずとも一般的な知識の範疇で理解できる説話である。創造主である神が真心を込めて宇宙を創造し地球環境を整え、最後に自分の形に似せて人類を誕生させた。それぞれの創造を終える度ごとに「善しとされた」という神の創造の満足は、特別な信仰を有せずとも、人類の起源について真摯な態度で哲学的にその存在論を『聖書』にそれを求める者には情緒的にも「神の喜び」というものを読み取ることができるはずである。西田はそのことを作品とそれを創作した芸術家の感動のようなものと説明している。

「或者はこの世界は偶然に存在する者ではなくして一々意味をもった者である、即ち或一定の目的に向かって組織せられたものであるという事実を根拠として、何者か斯くの如き組織を与えた者がなければならぬと推定し、斯くの如き宇宙の指導者が即ち神であるという、即ち世界と神との関係を芸術の作品と芸術家の如くに考えるのである」^{注(9)}

またカントが『人類の歴史の臆測的起源』の中で人祖である「アダム」「エバ」の実名を一度も呼ぶことがないのは如何なる意味であろうか。そればかりか息子たちである「カイン」「アベル」の名前も一度も登場することがない。

『聖書』における神からの召命はいずれも神自らが登場人物を実名で呼ぶことからしても聖書において名前は重要なものであると言われているが、カントがそれに呼応しないのは如何なる意味があるのであろうか。まさかカントともあろうものが登場人物の名前を忘れたのではあるまい。それともカントにとってはその様なことは大した問題ではなかったと考えるべきなのであろうか。

歴史の研究の上からも出来るだけ実名を記す事が資料的価値を増すという観点からも実名を敢えて使用する事は自然なことではなかろうか。しかしながらカントがそれを避けている事は、カントが『聖書』をそもそも単なる神話として考え、しかも『聖書』に歴史的な価値を感じていなかったという事であろうか。

前述した通り『人類の歴史の臆測的起源』執筆中の当時のカントの頭の中には創世記の前半部分の記憶は十分に引き出せたであろうから、記憶の喪失ということではなく敢えて何故そのような方法を取ったのかは詳細な研究を要すると考える。

創世記に見える神が人祖に与えた「生めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ」という祝福は人祖にとって祝福でもあるが又それは人祖の使命でもあったはずである。しかし、その後の墮落によってその神の希望は崩壊されてしまった。そのことは親である創造主の立場から見れば非常に驚きであり落胆であったはずである。そのことについてもカントは一切触れる事はない。そこに道徳研究者であるカントの悲哀は少しも感じることはできない。少なくとも『人類の歴史の臆測的起源』からは、カントが神に対する何らかの関心・同情等の思いやりなどを読み取ることは出来ない。

このように失樂園の物語を始めとする『聖書』は、全知全能の至善なる神から創造され生れた人祖達に如何に悪が入り、その悪が人類にどのように蔓延して行ったかということを考える上で極めて重要な資料を提供するものである。

神の深い悲しみであるはずの人祖の墮落もカントにとっては

「人間が自然状態を脱して人為すなわち文化の状態に入っていくこと」^{注(10)}

つまり人類の自然からの進歩として考えているのである。西田にとっての神は「己と血族の関係ある神」であるが、カントにとって神とは「思弁的理性によって理念としてのみ捉えられた神」であって「理性宗教としての

神」であり、宗教的体験の裏付けのない神であると指摘している^{注(11)}。

そのように人格神としての神の悲しみや痛みは、このカントのこの著述からは全く感じとることが出来ないのである。

倫理的観点からみても、聖書に於ける人祖の墮落の原因が戒めを破ったこと又その後の責任転嫁、更にその者達が将来親になり正しく子供たちを導く事が出来なかった。そのために、今日の人類は人間としてのあるべき姿ではなく、あるべき位置に立っていないことは明らかである。それを教え導くための教師が歴史的な意味における救世主である。つまり人祖の示し得なかった人生の意義と目的を思想として万人に教え示し伝えると同時に、それに至る倫理的行為の方法を具体的に指導するのである。哲学ではこれを「真理の探求」と言い、宗教では「救い」と言う。その普遍的な目標が達成された時に人類は最大の幸福を得ることが出来るはずである。しかしながら、これらの事は残念ながらカント倫理学からは読み取ることは出来ない。

この失樂園の創造主の立場から見れば絶望であり失意であり悲哀であるこのことにカントは少しも触れていない。しかし西田は次のように言う。

「神なくして宗教というものはない。神が宗教の根本概念である。—中略— 神は我々の自己に心霊上の事実として現れるのである。」^{注(12)}

少なくとも『聖書』を資料として研究を進めるのであるならば、西田の言う如く常に神が主体となるべきことは言うまでもない。特に創世記においては当然のことである。しかしながらカントの『人類の歴史の臆測的起源』からはこのような西田の主張する指摘は微塵も感じることが出来ないのである。このことはフリードリッヒ・シェリングの『人間的自由の本質』の中に次のように述べている。

「苦悩する神という考えなくしては、歴史的全体は畢竟不可解である」^{注(13)}

とあるように神は人間と同じように痛み、苦しみ、悔いる神なのである。

そのことは、信仰の有無に関係なく我々は普通に自然な形で有する感情である。これはカントの宗教観に大いに関わる問題である。また西田は次のように言う。

「宗教に至っては、カントは、ただ道徳的意識の上から宗教を見ていたと思う。霊魂不滅とか、神の存在とかいっても、ただ道徳的意識の要請たるにすぎない。カントにおいては、宗教は道

徳の補助的機関として、その意義を有するのである。私は、カントにおいては、宗教的意識そのものの独自性を見出すことはできない。カントは、そういうものを意識していたとは考えられない。「単なる理性」blosse Vernunftの中には、宗教は入ってこないのである。宗教を論ずるものは、少なくとも自己の心霊上の事実として宗教的意識を有つものでなければならない。しからざれば、自分で宗教を論じているつもりでいても、実は他のものを論じているのかもしれない」注⁽¹⁴⁾

西田の言う如くカントにとって宗教というものは自己の道徳的理論を意義付けるためだけのものではなかったのであろうか。

宗教的体験というものは一種の啓示であるということから考えると、カントが理性宗教の立場から啓示を排除したのもうなずけることである。そのことは量義治氏が『理性宗教とキリスト教』の論文の中でキルケゴールの『おそれとおのき』を引用して次のように述べている。

「道徳は普遍的なるものであるが、信仰は個別的なるものである。そして信仰においては個別的なるものが普遍的なるものに対して優位するものである。道徳から信仰を解することはできない。道徳的信仰は道徳であって信仰ではない」注⁽¹⁵⁾

このキルケゴールの見解をもって『人類の歴史の臆測的起源』に見えるカントの宗教に対する冷淡さはほぼ了解出来るのではあるまいか。カントの宗教観はともかくとしても『聖書』を使用して思考を展開しているのであるからもう少し『聖書』に非日常的な宗教的敬意を払うべきではなかったかと思わざるを得ない。

また『人類の歴史の臆測的起源』の冒頭において「神の悲しみ」であるはずの人祖の墮落行為についてカントは次のように述べている。

「人類が未開状態を脱出して社会を造ったのは、人間が自然の意図を帯して、理性と自由意思との使用に踏み切ったためであり、このことを人類が自分の本分の達成に問う第一歩とみなすのである」注⁽¹⁶⁾

とするカントのこの考えはあまりにも独善的であり、見方によっては、人祖の墮落行為を賞賛しているようにさえ解釈出来る。そこからは創造主であり親である神に対する同情の思いは微塵も感じることは出来ない。そのことは「理性」のみに重きを置き過ぎたカント哲学の限

界を示すものであろうか。

量義治氏は「カントには実存的な宗教体験がなかったのではないか」と言っている事からもうなずける^{注(17)}。

因みに、カントの尊敬するルソーでさえ「人類が本来の無邪気で幸福な楽園を捨てて社会を形成したことは人類の墮落であり、不幸の始まりである」として人祖の墮落は本来起こるべきでない事故であったと認識している。

V. 『人類の歴史の臆測的起源』に見えるカントの『聖書』観の分析

カントは人類の歴史の起源を『聖書』に求めながら「史料の欠陥を補うために、臆測を挿むことは許されてよい」^{注(18)}と前置きして論証を始めている。

「臆測は、いわば心に健康と気晴らしとをもたらすために、理性を伴うところの想像力に許された活動というだけのものであり、厳粛な仕事をもってみずから任じてはならないのである。それだからまた臆測は同一の出来事についても、それ史実として提示されまた信じられているところの本来の歴史とは、とうていくらべ物にならない、かかる史実の吟味は、単なる自然哲学とはまったく異なる根拠に基づいて行われるのである」

カントはこのように前置きして『聖書』から24ヶ所を引用しながら論を進めていく。『人類の歴史の臆測的起源』で人類の歴史の起源を『聖書』に求めているカントは、先ず創世記第二章を引いて、人間の始祖であるアダムとエバを登場させる。しかし、そこでカントは次の条件をつけている。()のある部分はそれに対する筆者の見解である。

- 《1》 母親の扶助を必要としない成人した人間としての存在。(「カントのこの最初の見解が致命的である。人祖が成人で誕生。成長期間不要)
- 《2》 種族を繁殖させぬ夫婦として存在すること。
- 《3》 ただ一組の夫婦であること。
- 《4》 他と戦うことがないように単一家族であること。
- 《5》 温和な風土に恵まれている園いわば楽園(エデンの園)にあること。
- 《6》 最初人間はすでに起立して、歩行することができる。(致命的誤認)
- 《7》 物を言うことができること。すなわち連関し合う概念に従って語るすることができる。(乳幼児は言語学習が必要)

このような前提条件から分かるように、神によって創

結 論

造された人祖達は、始めから成人として誕生したとカントは考えている事が分かる。更に、言葉を操れるし歩くことも可能である。その事から人祖達は誕生した時に既に肉体的・生理的には完成していた事を意味する。

そこに先ず一番大きな矛盾点が見られる。神の似姿に創造された人間がしかも既に成人している大人でありながら罪を犯してしまうのかという事である。

カントは「人類の起源からの考察」といいながらその不条理に少しも然るべき疑問を持っていない。然るべき疑問と言うのは、人間の身体的成長と同時に人格的情緒的な成長ということに関する事である。生物の成長はたとえそれが本能的機能であっても、完成に至るまでには然るべき時間を要する事は言うまでもない。ことさら、それが人格の完成と言うことになればその教育に要する時間、換言すれば成長に要する期間のみならず、その教育に関する質の内容が問われることは必須である。カントにはそのような観点からの考察がないと言うことである。

そのことは、そもそもカントが実際に『聖書』に於ける、人祖の誕生並びにその存在の原初の形を基本的にどのように捉えていたかという事を伺い知る重要な手掛かりになる。また人祖は「取って食べたら死ぬ」と予め警告されていたのにも関わらず、それを守ることができなかった。しかし実際に食べても死ななかったという事実から明らかにそれは身体の死を意味するものではなく、霊的・精神的な死であったという事も倫理学における死生観に関する多様なテーマを提供するものであるが、カントはそれに対しても何ら関心を寄せていない。

また人祖達のその後の神からの問いかけに対して責任を転嫁していく反道徳的な行動に対しても同様に興味を示していない。

もしカントが『聖書』のこの失樂園の物語を単なる神話でなく、そこに現実の倫理的問題を解決する重要なヒントが隠されているという事に気づき、それを基に人類を「人格の完成」に至らしめるべくカント倫理学を展開させ、更に実生活において、その方法を実践的に学習することを可能にするプログラムを示してきていたならば、カントのその時代に既に当時の社会を十分に善の世界に導いていくことが出来ていたのではないかと悔やまれる次第である。

カントは『人類の歴史の臆測的起源』を出版する二年前には『啓蒙とは何か』（1784年12月）『世界公民的見地における一般史の構想』（同年11月）において通俗ながらも真剣に哲学的論議を投げかけて当時の哲学界に大いなる警告を与えている。しかしながらこの『人類の歴史の臆測的起源』は『聖書』の記述を資料としていながらもあまりにも軽い論調で執筆されている。

この『人類の歴史の臆測的起源』に見えるカントの「原罪」に対する考え方は人類の根本悪の追及を真剣になしたものととは思えない。それは悪の起源である「原罪」に対する考え方に哲学・倫理学学者としての真剣さを感じられないと言うことである。

本小論のこの結論部分に於いては僭越ながら『人類の歴史の臆測的起源』に見えるカントの見解に対する批判を加えながら結論を述べて行く。

倫理学の研究は一言で言えば外的には至善の追求であり内的には人格の完成でなければならないと考える。「なぜ倫理が必要か風土・風習に則した倫理で十分ではないか」との考え方が往々にしてある様であるが、それは西田幾多郎の言葉をかりて言えば「かかる問いを発するものは自己の生涯の真面目ならざるを示すものである。真摯に考え真摯に生きんと欲する者は必ず熱烈なる宗教的要求を感じずにはいられないのである」（『善の研究』第四編 第一章 宗教的要求）と同様な問いであると言える。

また本小論の要旨にも述べたように西田が「哲学の終結と考えている宗教」とあるように、人間の存在目的は最終的には宗教的認識における自覚に至らねばならない。つまり「人格の完成」であり「主格合一の状態」になる事であり「物我一体の意識統一の要求」であり「宇宙との合一」なければならないはずである（『善の研究』第四編 第一章 宗教的要求）。しかしながら当時のカントにはそもそも人間は「人格を完成すべき」存在であるという考え方は不在の様である。又それに至るヒントが『聖書』の「創世記」に隠されているなどとは思ってもいない。つまり、この世の悪の存在と『聖書』に見える人祖等の墮落との関係性については無頓着である。

その様にカントは哲学・倫理学の本来の使命が人間の「人格を完成させる」ための具体的な方法を世に示す為の学問であるべきであるとは考えていなかったようである。また同時に倫理学の使命が人間を人格完成へ導くための「説明書」「指南書」的役割を担うべきであり、人間は自由意志を駆使し自らの責任で、克己・修己の修行によって自己中心の欲望を克服して人格を完成すべきであるという発想にも思い至っていないようである。またそのためには「成長期間」が必要であるというようなこと

もカントの念頭には全くなかったようである。

人類始祖による「墮落」の悲劇を単に「理性への目覚め」とのみカントが解釈している事は誠に残念な事である。同時にその救済の為に墮落している人類を「人格の完成」へと導くために道徳哲学が必要であり、更に宗教倫理学のような学問が必要であるとの見解もカント哲学には感じられない。

人格が未完成な人類にとって、人格の完成に向うことを人間の本分とすることは当然のことである。当然かかる主張に思い至るにはいくつかの前提条件が必要である事は言うまでもない。例えば先ず何故、全知全能の神は他の被造物らと異なりわざわざ多大な成長期間を有する未完成な人間を創造したかということである。それについてはピコ・デラ・ミランドラが『人間の尊厳について』（1486年）の中で主張しているように「人間は他の万物と異なり（自由意思）を神より与えられている」という事の意味が深く自覚されなければならない。

前述したように『人類の歴史の臆測的起源』では、人祖の創造は誕生の時から成人として創造され生を受けていると記述されている。そのことについても、カントは疑問を持つことがなかったようである。

また人間と他の生物との大きな差異、つまりなぜ人間は身体の成長に伴って精神も自動的に完成しないのか、ということに疑問を抱けば人間の成長には、当然「然るべき教育」と「成長するための時間」が必要であり特に「倫理・道徳を中心とした教育」が人格を完成に導く為の教育の根幹でなければならないということが了解できたはずである。

人類始祖の犯した墮落という事が単なる過去における一過性の事ではなく、我々はその事件を通して他者に対する思いやり、更には他者の負債をも引き受ける「仁の心」他者の不幸を見過ごせない「惻隱の心」等の心情を実践的にそれらの徳目を学び習得して子孫に伝えるべきと自覚すべきである。

またカントは「道徳と宗教との密接な関係」を『実践理性批判』において説いていながら、また一方では『理性だけの範囲内における宗教』の第一版序文で、「道徳に宗教の必要性は全くない」と言い切る。そこに道徳哲学者カントの決定的な油断を見る次第である。

しかしながら、『人類の歴史の臆測的起源』の後半部でカントが言うように原罪が遺伝的に子孫に随伴するものでないとする事への洞察はカントの先見性である。〔本稿注（7）参考〕

人祖アダムとエバは犯してしまった墮落による不安から来る良心の呵責に日々、苛まれ常に精神が不安定な状態に置かれてその負債に苦しんでいたはずであるから、親の子に対する責務としての人格完成の為の教育を子供たちに適宜、施すこと事はほとんど不可能であったこと

事は想像に難くない。

人間の精神的成長にはどのような形であるにせよ「教育」というものが必要であることは言うまでもないが、特に「道徳教育」が人格を形成していく上で重要であることは先に述べたとおりである。人祖の家庭において、そのことが十分でなかったことは人祖の家庭における息子たち（カイン・アベル）の殺人物語に如実に現れている。

しかしながら『聖書』にはこれらの物語は極めて抽象的にしか描かれていない。そのことは『古事記』等の古代の記述研究で言われるように「神代の古代社会の記録は事柄・事件のみが記されていて、登場人物等の心理などは敢えて描かない」という記録の方法に準じているものと思われる。その辺りの心理の空白部分は想像力を駆使するしか術はない様である。本稿執筆においても論理の飛躍に注意しながら出来るだけ帰納的に証明を重ねたつもりである。

『聖書』によれば、人祖達は神と直接に話をする事が出来たように描かれている。それらの能力以外は現代社会に生きる我々と感覚・情緒的にはそれほど差はないと考えられる。そのため時間の隔たりは在りながらも、現代を生きる我々でも当時の人祖の感情や思いを推し量る事は可能なことであろう。

我々は人間の嫉妬・自己中心・責任転嫁に始まった反倫理的行為のエデンの園の事件を単に過去の物語として考えるのではなく今日も様々な悪が存在する現代社会に生きる我々の課題として、日常の生活に常に起こり得る卑近な問題として認識しなければならない。その事を西田幾多郎は次のように言っている。墮落は『人祖アダム、エバの昔ばかりではなく、我々時々刻々行われているのである』（『善の研究』第四編 第四章 神と世界237頁）

しかしながら、カントのこの『聖書』に見える人祖の墮落事件に対する考え方はあまりにも「理性」的解釈に拘泥し過ぎているのではないかと思はれる。

カントは倫理・道徳が人間の成長にとって如何に大事な働きをなすものであるかということ、ここでは全く問題にしていない。

或いは『聖書』の存在自体を「神の存在」「魂の不滅」など所謂「もの自体」の中に閉じこめてしまい最初から理性のカテゴリー外のこととして考えていたのであろうか。もしそれであるなら最初から『聖書』を資料とすべきではなかったのではあるまいか。又はカントにとってそもそも『聖書』は彼の哲学を構築するのにさほど重要な存在とは考えていなかったのであろうか。

その事は本書の中で「旧約聖書を漫遊する」^{注(17)}「臆測は、いわば心に健康と気晴らしをもたらすために、理性を伴うところの想像力に許された活動というだけのものであり」^{注(18)}と安易な言い方で表現するカントの言葉から想像する事は可能なことである。

『聖書』の資料としての扱い方はともかくとしても、少なくとも人祖達が有していた「嫉妬」「喜怒哀楽」「同情」等の隠された感情をこの創世記の記述から読み取ろうとする態度はカントには全く感じられないのである。

『聖書』のこれらの記録は、カントにとっては、有史以前の神話のような物語の一幕でしかなかったのであろうか。

創世記のこの部分は、比喩で表現されていながらも、人祖の自由意志の使い方の失敗が記録されている。同時に人祖達は、人間のみに任せられた愛の心情を中心とした倫理を「思想」として創生し、それを後世に伝えるべき使命があったことが暗に示唆されているものと考えられる。もし人祖達が墮落以前に、人間が戒めを守らず墮落した時の「己と血族の関係ある神」(『善の研究』第四編第二章 宗教の本質214頁)の悲しみを予想する事が出来たならば、彼らは罪に陥ることはなくひたすらに人間の始祖としての使命である人格を完成した元祖として今頃は人類史に君臨していたに違いない。

先にエーリッヒ・フロムの言うように^{注(19)} たとえ、墮落してもそこにアダムのエバへの同情があり更にはヘビ(天使)の犯罪をもアダムが請け負っていたならば、そこに他者を思いやる倫理が確立し、人間が自ら創生した「心情を中心とした文化」が創生されていたはずである。また全知全能の親なる神が願った「生めよ(生育せよ・Be fruitful)」が実現し創造の親なる神を感動させていた事は間違いない。そればかりか、他者を思いやる愛の心情の文化の伝統がその後の子孫たちに継承されていたはずである。しかしながら、残念なことに、彼等は、親なる神が如何なる心境で自分達の行為を見守っていたか想像することができない程に自己中心に陥っていたのである。「食べたら死ぬ」という戒めを破るのであるから人祖は「死んでも良い」という強い覚悟の下にかかる墮落行為に及んだに違いない。神の戒めを破る時の人祖達のその心境を「未だ経験したことのない本人たちの予想を遥かに超えたもの」^{注(20)}であった、とカントも言っている。

この命がけの自己中心の思想を、人祖が選択した時、その後の子孫達が困難な道を行かざるを得ないように決定付けられたのである。

人類史における暗くて長い道を模索しながらその道の正しい歩み方を指導することが宗教の使命である。また迷える子羊たちに歩み方を教え示すのが救世主である。「誰でも生まれ変わらなければ真理の道にいけない」という聖句がキリスト教でいうところの「新生」である。それはキリストを信じる者だけでなく全人類が「新生」しなければならないという事である。

エデンの園に於ける墮落行為が行われたその時に、人祖の思考回路、特に心情の成長・発達に関する重要な脳

の機能が破壊されるほどに衝撃が及んだことは想像に難くない。しかしながら人間には生物としての本能的機能は温存され失われてはいないから子孫の繁栄は連続している。しかしながら人間の正しい倫理観を教えてくれる真の親が不在なため、いつまでも本来の人間として人格を完成することが出来ず、相手を思いやる慈悲の心を喪失した自己中心の文化が世界に蔓延したまま我々は今日を生きている。

人類の始祖がエデンの園において創生すべきであった「人格完成」の良き伝統の不在が今日の世界に様々な混乱を及ぼしていることは明らかである。

古代中国に任された「忠恕」「孝」を中心とした「家庭倫理」を徳目とする、儒教文化はエデンの園から気の遠くなる程の時間を経てやっと幕を開けることになったのである^{注(21)}。

もしカントがその時代に人間という存在は、そもそも自己中心的でなく人祖の家庭において利他を中心とした倫理観が創生されるべきであったという事を強く真剣に熟慮し、その倫理の法則と並びにその方法と技術を発見し、利他的な行動を日常生活において実践化させ得るような倫理学を考え出してきてくれたならば、当時に既に悪のない平和な社会が創生されていたはずである。

この具体的な方法は、現代においてもまだ明確でないから、今日もなお常に問われ続けられなければならない課題である。同時にそれは人類が、かかる社会を実現するまで、倫理学の根本的なテーマでありつづけなければならないはずである。しかしながら、今日倫理学の研究分野において『倫理学に答えはあるか』『倫理学に何ができるか』等の倫理学の価値やその存在自体を問いつける著書が日々出版され続けられていることは、倫理学の研究者の多くがまだその事を目標としていないことの証拠ではあるまいか。

二千年以上の歴史を有する倫理学のこれからの研究課題は、今まで倫理学が提示することをしなかった「完成された人格」の人間の実体像とは如何なるものなのかを具体的に明示して、その目標に全人類を一日も早くそれに向かわせるように指揮をとる事である。

また人類が日常を生きる中で、正しい倫理的な思考・心の持ち方・行動の仕方の具体的な方法を示すと同時にその実践の積み重ねを通して、西田の言う「偽我を殺し尽くして一たびこの世の欲より死して後蘇るのである」^{注(22)} また「真の自己を知る」^{注(23)} こと、つまり「自己の個性の実現」^{注(24)} が人格完成に到る為に必要な道であることを世に提示する事であると考えられる。

またその事は西田哲学が目指す「最も直接なる善」であり「真の自己を知れば^{ただ}畜に人類一般の善と合するばかりでなく、宇宙の本体と融合し神意と冥合するのである。宗教も道徳も実にここにつきている」^{注(25)} である。

人類は倫理的に生きることが本来の人間の姿であり、それを目標にして人生を生き人格の完成に至るべきであるという事を真剣に自覚しなければならない。

またそれが思想としてばかりでなく、具体的な教育の方法・修養法として実践可能な形で受肉化され、社会から悪が完全に駆逐された時に完全なる善の社会が自動的に創生される事は言うまでもない。

<注釈>

注(1) 西田幾多郎, 1994, 『善の研究』岩波文庫, 第4編第一章宗教的要求 212頁

注(2) 『前掲書』212頁

注(3) 『前掲書』206頁「我々の真の自己は宇宙の本体である。真の自己を知れば直ちに人類一般の善と合するばかりでなく、宇宙の本体と融合し神意と冥合するのである。宗教も道徳も実にここに尽きる。而して真の自己を知り神と合する法は、ただ主格合一の力を自得するにあるのみである」を参照。

注(4) 『前掲書』212頁「宗教的要求はかくの如き意味における意識的統一であって、兼ねて宇宙と合一の欲求である」を参照。

注(5) 『聖書』「創世記」2章16・17節

注(6) 西田幾多郎 1994, 『善の研究』岩波文庫 第4編 第一章宗教的要求 212頁

注(7) イマニエル・カント, 2014, 『啓蒙とは何か』「人類の歴史の臆測的起源」岩波文庫 79頁
「第一は、人間に重くのしかかる数多くの害悪があるからといって、その責任を摂理に帰してはならない、ということである。また第二に、人間は自分の犯した過ちを人類の先祖の原罪に帰するいわれはない、ということである。この祖先の犯したのと同様の過ちを犯す性癖のようなものが、原罪によって子孫に遺伝されている(しかし人間が自分の意志に従って為すところの行動に、遺伝的なものが随伴する筈はない)と考えるのは誤解であって、人間は自分の犯した過失から生じたところのものを、まさしく彼自身の所為と認め、従ってまた彼の理性の濫用から発生した一切の害悪については、その責めをすべて自分自身に帰せねばならない」更に本書の訳者である篠田英雄氏が訳者後記 197頁において「なお子孫に遺伝するという原罪の思想をカントが否定していることは注意してよい」と述べている。

注(8) 『前掲書』64頁～70頁

注(9) 西田幾多郎, 1994, 『善の研究』岩波文庫, 第

2編 第十実在としての神 121頁

注(10) イマニエル・カント, 2014, 『啓蒙とは何か』「人類の歴史の臆測的起源」岩波文庫 64～66頁「補説」

注(11) 上田閑照編, 『自覚について』他四編 西田幾多郎哲学論集Ⅲ 岩波文庫 301頁

注(12) 『前掲書』

注(13) フリードリッヒ・シェリング, 1951, 『人間的自由の本質』岩波文庫 西谷啓治訳

注(14) 西田幾多郎「場所的理論と宗教的世界観」『西田幾多郎全集』第11巻373頁

注(15) 浜田義文編 1994 『カント読本』「理性宗教とキリスト教」法政大学出版局313頁

注(16) イマニエル・カント, 2014, 『啓蒙とは何か』「人類の歴史の臆測的起源」岩波文庫 53頁

注(17) 浜田義文編 1994 『カント読本』「理性宗教とキリスト教」法政大学出版局313頁

注(18) 『前掲書』53頁

注(19) 本論文3頁

注(20) イマニエル・カント, 2014, 『啓蒙とは何か』「人類の歴史の臆測的起源」岩波文庫64頁～66頁

注(21) ブリュッケ, 1935, 『儒教大観』後藤末雄 訳 60～65頁

第一章「徳治主義の起源と其の本質」に「初めて支那の社会を建設した人々は神の創生伝説を保存していたかもしれない。或は人民の存続に必要な方法を発見するために、自然法則を研究して、この観念に到達していたかも知れない。または二三の外国人からこの観念を受けついでいたかも知れない。その孰れにせよ、彼等が人間を以って叡智の所産なりと信じていたことは疑ひを容れない。支那の古典によれば、この叡智こそ生きとし生ける者に目的を指定し、この目的に到達するみちを授けたのであった」と見えていて、古代中国の天(神)からの使命らしきものが説かれている。

(旧字体は現代仮名使に改めた)

注(22) 西田幾多郎 1994, 『善の研究』岩波文庫 第3編 第十三章 完全なる善行 206～207頁

注(23) 『前掲書』206頁

注(24) 『前掲書』195頁『善の研究』第3編 第十二章 善行為の目的

注(25) 『前掲書』206頁『善の研究』第3編 第十三章 完全なる善行為

<参考文献>

ここに掲載した参考文献は、本稿執筆のために参考にした文献である。前掲の〈注釈〉とは直接に呼応しない

1. C.ヴェスターマン著 山我哲雄訳『創世記』教文館 2005年
2. C.B.シンクレア著 小友 聡訳『創世記』日本キリスト教団出版局 2011年
3. A.J.ヘッセル著 森泉弘次, 末松こずえ訳『神と人間のあいだ』教文館 2004年
4. 谷峰一郎『アウグスティヌスと東方教父』九州大学出版会 2011年
5. 北森嘉蔵著『神の痛みの神学』教文館 2009年
6. 関根清三『アブラハムのイサク献供物語』日本キリスト教団出版局 2012年
7. イェルク・イエレミアス著 関根清三, 丸山まつ訳『なぜ神は悔いるのか』日本キリスト教団出版局 2014年
8. ピコ・デラ・ミランドラ著 大出哲, 阿部包訳『人間の尊厳について』国分社 1985年
9. 藤田昇悟著『カント哲学の特徴』晃洋書房 2004年
10. 坂部恵『カント』講談社学術文庫 2001年
ジル・ドゥルーズ著 国分功一郎訳『カントの批判哲学』ちくま芸文書 2008
11. カント著 篠田英雄訳『プロレゴメナ』『純粹理性批判』『判断力批判』『道徳形而上学原論』岩波文庫
12. 小倉志祥訳『カント全集』第13巻 理想社 1988年
13. 高坂正顕『カント』理想社 1977年
14. 西田幾多郎『西田幾多郎全集』岩波書店 1977年
15. 宇都宮芳明『カントの啓蒙精神』岩波文庫 2006年
16. 井筒俊彦『禅仏教の哲学に向けて』ふねうま舎 2014年
17. ヴォルテール・安斉和夫訳『歴史哲学』法政大学出版局 1989年
18. 西谷啓治『宗教とは何か』創文社 1981年
19. キルケゴール著 榊田啓三郎訳『キルケゴール』筑摩書房 1973年
20. フランシス・ヘチスン著 田中秀夫, 津田耕一訳『道徳哲学序説』京都大学学術出版会 2009年
21. リチャード・J・バーンスタイン著 阿部ふく子, 他4名訳『根源悪の系譜』法政大学出版局 2013年
22. ジャン・ナベール著 杉村靖彦訳『悪についての試論』法政大学出版局 2014年
23. リチャード・ティラー著 古牧徳生, 次田憲和訳『卓越の倫理』晃洋書房 2013年
24. A・C・ユーイング著 竹尾治一郎, 山内友三郎訳『倫理学』法律文化社 1994年
25. ピーター・ウインチ著 奥雅博, 松本洋之訳『倫理と行為』勁草書房 2009年
26. 高山岩男『宗教は何故必要か』創文社 1953年
27. パトリシア・S・チャーチランド 信原幸弘, 樫則章『脳がつくる倫理』化学同人 2013年